

---

# 最後のメール

風唄 沙耶

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最後のメール

### 【Nコード】

N4804T

### 【作者名】

風唄 沙耶

### 【あらすじ】

どこにでもいるような恋人の、最後のメール。

普段何気なく送っていたはずのメールなのに、最後は送ってくれなかった。

『来週提出の課題終わった?』 「あ、まだ」

『今日の映画、面白かったね!』 「そうだね」

『待ち合わせ時間、何時にする?』 「9時くらいでいいと思

う」

淡い青色の空に、綿飴のような雲が浮かんでいる。冷たい空気が頬に触れていった。身を縮こまらせながら横に並んで歩いているのは、いわゆる『彼女』。

恋人の琴美と付き合い始めたのは、中学3年生の体育大会のときから。同じ高校に進み、メールもするし、帰宅時間が重なれば一緒に帰る。そんなありふれた、どこにでもいるような恋人同士。

単なる『仲のいいクラスメート』だった関係が、『恋人』という関係に変わったきっかけは、琴美からのメールだった。実際それから、琴美は俺のことを心から好いてくれていたし、俺も琴美が大切だった。

そんな彼女は、今日の昼休みの友だちとの会話を俺に話している。それも、いつも通りの幸せそうな満面の笑みで。

どうしてそんなに楽しいのか。聞いたのは昔のことで、彼女曰く

「横に、君がいるから」だ、そうだ。

「あ。ねえ、たい焼き買って行かない?」

「たい焼き?」

「うん。寒くない?」

「寒い」

まあ、冬なのだから当たり前だが。隣で、白いマフラーで鼻まで覆っている様子は、見ようによつては不審者に見えなくもない。

「買ってやるうか」

「え！ え、いいの？」

「驚きすぎだろ」

そんなにケチに見えるか？

そう言ってから財布をポケットから取り出して、店主に声をかける。熱いくらいのたい焼きを琴美に手渡すと、本当に嬉しそうな顔を見せた。

「ありがとう！」

「どういたしまして」

と、礼儀正しく（？）挨拶を交わしてから、早速たい焼きをぱくつく。寒空の下では、ただ温かいというだけでありがたい。甘党の琴美に感化されたのか、いつの間にやら俺も甘党になっていた。…いつからだ、本当に。

幸せ。とは、このことを言うんじやなかるうか。

少し抜けてる琴美が側にいるだけで、たまらなく嬉しくなる。バカップルだと罵られようと、事実だから仕方がない。

だから、俺がこのとき琴美の心境を理解できなくても、仕方がなかった。とは、思う。「……ねえ」

「ん？」

「今日の夜、メールしてもいいかな？」

珍しい、と思った。琴美からメールが来るのは、毎晩のことだったし、それはお互いの暗黙の了解のつもりだった。今まで見たことがないくらいに深刻な表情に、俺はわざと笑って返した。「いいけど？ なんでわざわざ」

「大事な話があるの」

たい焼きを持っていた笑顔から一変して。琴美の表情が、泣きそうな悲しそうな、それでいて真面目な 俺の苦手な顔に変わる。

冷たい風が、琴美のセミロングの髪を揺らしていった。

『別れよう』

その、たった4文字のメールを受信したのは、風呂上がり後。俺が部屋に帰って、そろそろ寝ようかとベッドにぼんやり寝転がっていたときだった。

しばらく、何を言っているのかわからなかった。節電のためにディスプレイが暗くなってから、やっと我に返る始末だ。事情を聞くために、白いディスプレイの端に書かれてる『返信』を選択する。あまりのことに、俺の思考回路は完全にショートしてしまっただよう。何を聞いたらいいいのかすらもわからない。

文字の入力を促すカーソルが、せわしなく点滅を繰り返している。文章を組み立てること以前に、まともに脳が回転していない。

疑問符ばかりが浮かぶ思考を早々に打ち切り、電源ボタンを2回連打する。待ち受け画面から、着信履歴を引っ張り出し、1番上の名前を選択。

単調なコール音は、俺を落ち着かせることはなく、逆に不安を倍増させていくだけだ。やがて聞こえてきたのは、「電波が届かない場所にいるか、電源が切られている」というお決まりのメッセージ。「琴美……？」

もう1度さっきのメールを引っ張り出し、下に文章が続いていないか確かめる。「なんて、「冗談だよ」とかいう文章を期待して。

しかしそれは無駄な行為に終わり、確かに文章はそこで終わっていた。

風呂上がりだというのに背筋に寒気が走り、俺は明日学校で聞くつと、早めに布団に潜り込んだ。

もっとも、眠れやしなかったが。

結局、一睡もせず夜が明けた。5時頃に、チラリとだけ眠くはなったが、2時間だけ寝ても逆にキツいだろうと思って、そのまま徹夜した。

冷たそうな風が、やかましい音を立てて部屋の窓を叩いていく。窓から家の前を見下ろすと、琴美がいなかった。

わずかな期待を抱いたが、無駄になってしまった。ため息をつきながら携帯を開いて見た時間は、7時ちょっと過ぎ。

居間に降りていくと、すでに焼けているパンの匂いが鼻腔をくすぐった。中央に置いてあるサラダの大皿から、食べる分だけ入れる。……入れたくない。

ダメだ。食欲の欠片すら湧かない。肉体的な変化が、精神的に相当打撃を受けていることを教えてくれる。

焼きむら1つないトーストに、薄くマーガリンを塗りつけて……食欲がなくなった。相当参っているようだ。

「ごめん、母さん。今日は朝飯残すよ」  
「残すよって……全部？」

母さんの返事に小さくうなずいて、2階の自分の部屋に戻って着替えを済ませる。少し早いけども、もう出よう。教室に行ったらきっと、琴美がいつも通りの笑顔で席に座っている。

……なんてのは、期待しないほうがいいんだろうな。

風邪でもないのに重い身体を引きずって、その日は無気力なまま授業を受けた。琴美は、学校にも来ていなかった。

いい加減、琴美に対する感情が、戸惑いから怒りに変わってきた。あれから4日経ってからも、琴美は学校に来なかったし、連絡1つ入れなかった。

電話は相変わらず、つながらない。メールを送っても返ってこなくなつた。琴美と仲がいい女子たちに聞いても、知らないの一点張り。

琴美が俺に会う気がないなら、もう関わるまいと思った。大切に

してきたつもりだったけれど、琴美には伝わっていなかったということだろうか。

今日は何かの会議とかで、いつもより早く授業が終わった。半ば投げやりな気持ちで、ざわついた教室を出る。いつの間にかホールームは終わっていて、今日も実りのない1日を過ごした。なんて、柄でもないことを考えた。

何年も琴美と歩いた道を、1人で歩く。たい焼きを買おうとも思わなかった。もう何もかもが、どうだっていい。

琴美がいらないだけで、こんなにも違うのか。頭の片隅で、どこか冷静な俺がつぶやいた。

しかし、そんなつぶやきに耳を貸すつもりはない。気付かないフリをして歩き続けると、ふいに携帯がポケットの中で振動した。

ディスプレイを見ると、非通知表示が浮かんでいる。一瞬だけためらってから、俺は携帯を耳に当てた。

「はい」

『あ、もしもし？ 琴美の母ですが』

琴美の母親。家に遊びに行ったときに、会ったことがある。

「なんですか？」

本人ならともかく、母親が連絡してくる理由なんて、見当もつかない。やや無愛想に聞くと、母親の声が電話越しに耳に届いた。

『あの……、病院に来てもらえませんか？』

「は？」

明らかに震えている声から、声を抑えて泣いているのがわかった。携帯を握りしめ、向こうの言葉を待つ。

『琴美が今、亡くなっ たんです』

「……………え？」

思いがけない言葉に手から携帯が滑り落ち、アスファルトの歩道で跳ねた。

聞いた病院に、俺は半信半疑で足を運んだ。実際は、半疑どころではなく8割くらい疑っていたが。

琴美が死んだ？ まさか。まさか琴美に限って、そんな馬鹿な。

いきなり突きつけられた事実には、思考がつかない。「あ」ロビーに入ると、琴美の母親が駆け寄ってきた。俺は軽く会釈してから口を開く。

「琴美は……」

「……30分ほど前に」

その一言で、伝わった。

病状を説明しようとする彼女の目から、涙が溢れ出る。その涙が俺に思い知らせた。

夢でも冗談でもない。琴美が死んでしまったことは、紛れもない現実なのだ。

倒れそうだった。今にも気を失いそうだった。いや、失えた方が楽だったかもしれない。「……いつから、こんなことに？」

「かなり前からんだけど、最近になって急に悪くなって……5日前から入院したのよ」

「……」

言葉を失う俺をチラリと見て、琴美の担当医らしい医師が彼女を連れて行った。俺は携帯を開き、母さんに連絡を入れる。

「今日は帰らない」。無機質な『送信しました』の文字を確認してから、携帯を閉じた。

あまりの展開の速さに、俺の身体は涙を流す余裕すらないようだった。言葉にしがたい喪失感のようなものを抱えつつ、飲み物でも買おうと思って病院を出た。

夕焼け空が、白い病院の外観をオレンジに染めていた。自販機を探して周りを見回すと、見慣れた人影が目に入る。

キュツとくくったポニーテールと、琴美より少し高いくらいの背丈。あれは。

「宮下？」

思わず口をついて出た声に、人影が振り返った。間違いない、宮下だ。テニス部員であると同時に琴美の一番の親友でもあった、俺らのクラスメート。

「なんで、こんなところに……琴美か？」

「そうだよ」

宮下がペットボトルのふたを閉めた。泣きはらした赤い目が、じつと俺を見つめる。「あんたも、琴美でしょ？」

「ああ」

ポケットから小銭を出し、無造作に自販機に突っ込む。しばらく沈黙が流れ、俺は乾いた喉にウーロン茶を流し込んだ。「……俺には、何もできなかったからか？」

と、思わず口をついて出た言葉に、宮下が驚いたように顔を上げた。言った後に自分が声を発したことに気がついたのだから、俺自身もびつくりした。「何が？」

「俺らさ、1週間くらい前に別れたんだけど」

「うん、知ってる。琴美から聞いた」

「一方的に『別れよう』ってメール、送られたんだよな。それ以来、連絡取れなくて」

「……………」

重い病気だったから。医師でも何でもない俺には、何かできるはずもなかったから。だから。

「だから、琴美は俺に別れようなんて……………」

宮下が、キツと俺をにらみつけた。瞬間、頬に走るビリビリとした痛みに、平手で思い切り打たれたのだと悟る。「宮下？」

「馬鹿！ 琴美はね、何度も私に言ってたんだよ。あんたを『悲しませたくない』って。『心配させたくない』って。だから、別れたんだよ。」

死んじゃう本人が1番悲しいのに。なのに……」

宮下はそこで言葉を切り、涙をグイと拭った。何とか荒い息を整えてから、まだ少し震える声で言う。「……メールボックスの、受信フォルダ。見てみてよ」

ジーンズから出された琴美の携帯を、震える手で受け取った。うまく動かない指で、使い慣れない携帯を操作する。「……あんたといるときの琴美は、そりゃあ嬉しそうだった。話した話題、観た映画、つまらない雑談だって、あの子にとっては大切な」  
「もう、言うなよ」

涙声になっている宮下の声を、さえぎった。

言わなかったって、何を言いたいのかくらい、俺にもわかった。

『あ、まだ』

『そうだね』

『9時くらいでいいと思う』

誰にだって打てるような、何てことのない、つまらないメール。受信フォルダに溢れかえった絵文字1つない俺のメールについては、それらが消えてしまわないための、保護を意味する鍵のマーク。

どうして、こんなメールを保護する必要があったのだろう。ここに来る直前、琴美に対して俺は勝手に怒りの感情すら抱いてしまっていたのに。

待ち受け画面に戻そうと、クリアボタンを押した。すると一瞬だけ目に入る、『未送信メール1件』の文字。宮下には告げず、そのメールを開いた。

つらそうに涙をこらえていた宮下の顔が、くしゃりと歪んだ。

そのままうつむいて、声を抑えて、泣き出した。

「なん、で。なんであの子が、死ななきゃ、ならなかった、んだろ」  
途切れ途切れの、誰に対するものかわからない問いは、白い息と共に宙へ消える。それに答えられなかった俺は、再び口をつぐむしかない。

俺の目から一筋、涙が落ちた。夕日の美しいオレンジに、ただ照らされながら。

琴美の母親から、病室に案内された。白い布で覆われていない顔は、それでも紙のように白かった。

「5分だけ、2人きりにさせてもらえませんか？」

10分もしないうちに親類が来ると言っていた。頭を下げた無理を言い、やっとこさ了承を得て、病室に足を踏み入れる。

ベッドの脇にしゃがみ込んで、琴美の左手に触れた。……冷たい。いつも感じられたぬくもりは、今は感じられない。

別れた理由は、『俺を悲しませないため』か。

「カッコよすぎるだろ、マジで」

文句を言っても、あの困ったような笑顔は返ってこない。ああ、本当に死んでしまったんだ、と。琴美の左手に触れた指先が震えた。拭いたはずの涙が、再び溢れてくる。俺の涙腺はどうかしてしまっただらうか？

「琴美」

細過ぎる手を取り、もう動くことのない薬指にそっと口付ける。こぼれ落ちる涙が、真っ白なシーツに痕を残した。

「琴美……ッ！」

最後のメールが『別れよう』だなんて悲しすぎる。

お前の携帯に残された、あの未送信メール。あれを、俺らの最後のメールにしてほしかった。

今となつては、もう叶わない願いでしかないけれど。

遅すぎたなんて言わないで。

優しくて明るくて。誰よりも大切なお前に向けて、最初で最後のプロポーズ。

お前と全く同じ想いを、今度は俺からもぶつけよう。  
未送信メールに残された5文字の告白。

『大好きだよ』

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4804t/>

---

最後のメール

2011年5月27日21時10分発行